

研究通信

No. 59

1967.11刊
村落社会研究会
事務局

東京教育大学
文学部
社会学研究室内

第十五回大会を終り

事務局退陣あたつて

昨秋、何ということなしに事務局を引受けてしまった。「村研」からはどんな注文でも「ノー」といえない立場はつらい。が、このときだけは「果して会員の期待どおりやれるか」という不安があった。ところが誰かがいた。「君はいつも旗振りだけじゃないか」まことだごもつとも。今回も案の定、中田君には委員として事務局業務を、牧野君にはフリーで大会準備を分担して頂き、後藤綱大を相談役に据え、私は例によつて「旗振り」にまわってしまった。慚愧に堪えない。

予想通り、後藤相談役の指導よろしく、「通信」の発行、名簿整備、会費徵収にみせた中田委員の腕はすばらしかった。事務局最大の難問、大会開催は、牧野君の天才的センスでまず演出運営は満点との評判で「旗振り」はすっかり安心した。しかも二日目の伊良湖国民休暇村での報告と討議は、和氣と活氣にあふれ、「君達帰るつもりがあるのかい」と質問したいほど、裏方は財布の関係もある。

てハラハラしたとか。何がそうさせたのか。会の内容は省略するとして、「すばらしかった」「有難う」という讃辞やお礼状を山ほど、というと嘘になるが、ともかく沢山頂き、「今年の欠席者は損をした」という噂さえあるとか、いさか自画自説とはいえ喜んで退陣することができました。十五年を経た村研、農村問題は主題こそかわれ、いよいよ重大になりつつあります。来年の課題と事務局に期待して拙筆します。ご協力ほんとうに有難うございました。

(川越淳二記)